

TOSAギャラリー

夕刊なぞなぞ道場

かけたり、まわったり、あがったりする学校にあるものは？

となりの
ニューヨーク
木戸孝子

守りたいものの



自分のまつげが、近過ぎて見えないように、ニューヨークで暮らす前の日本は、私にとって、近すぎる存在だったようにです。逆に、あこがれの存在だったニューヨークは、マスコミが伝えるかっこいい場所ではなく、人々が必死で生きていく、世界のどこにでもある場所でした。日本とアメリカ、という比較対照するものができると、両方の良い部分と悪い部分、よりはっきりと見えるようになりました。

二〇〇八年、帰国し、六年ぶりにゆくり通りした東京は、あこがれのアメリカに、追いつけ追い越せと、やみくもに真似をしているように、私の目に映りました。しかし、自分自身が何者かを忘れたまま、欲望のままに他の何かを追い求めても、行き着く先には何も無いのでは。アメリカでは、自分への誇り、自分の意見、自分自身を持つていないと、誰にも相手にされません。ニューヨークで暮らすという事は、自分のアイデンティティを見つめなおす事そのものでした。

しかし、東京から高知に戻ると、様子が違います。自分の原風景からのメッセージを込めて、新しい作品、『Reexplorations』(再探検)が始まりました。

4月から新連載「鳥たちの日々」
角田和夫、中西安男、奈路広、木戸孝子のみなさんは今回で終わります。『愛読ありが』(ついで)さいました。四月からは高知市在住の野鳥写真家、和田剛一さんの「鳥たちの日々」が始まります。『期待ください』。

Re-explorations # 3
(Hirano Beach)



木戸 孝子 1970年、中村市(現四万十市)生まれ。フリーランスフォトグラファーとして、ムック本シネマキッチンなどの仕事を経て、2002年渡米。ニューヨークのインタナショナル センター オフ フォトクラフトで学ぶ。

高知新聞(夕刊) 2009年3月26日(最終回)

となりのニューヨーク ー守りたいものー

自分のまつげが、近過ぎて見えないように、ニューヨークで暮らす前の日本は、私にとって、近すぎる存在だったようです。逆に、あこがれの存在だったニューヨークは、マスコミが伝えるかっこいい場所ではなく、人々が必死で生きている、世界のどこにでもある場所でした。日本とアメリカ、という比較対照するものができると、両方の良い部分と悪い部分が、よりはっきりと見えるようになりました。

2008年、帰国し、6年ぶりにゆっくり過ごした東京は、あこがれのアメリカに、追いつけ追い越せと、やみくもに真似をしているように、私の目に映りました。しかし、自分自身が何者かを忘れたまま、欲望のままに他の何かを追い求めても、行き着く先には、何もないのでは、、、。アメリカでは、自分への誇り、自分の意見、自分自身を持っていないと、誰にも相手にされません。ニューヨークで暮らすという事は、自分のアイデンティティーを見つめなおす事そのものでした。

しかし、東京から高知に戻ると、様子が違いました。中村は、昔と変わらず、クールじゃなく、ありのまま、何もない場所のままでした。その何もなさあまりにも豊かで、自然の色彩にあふれて、私の目に飛び込んできました。

子供たちが裸で遊べる海。四万十川の透明の水。一度も見た事がない私の家の鍵。田んぼと山の一面の緑。街灯のない穏やかな暗闇。酔っぱらいが心おきなく酔っぱらせる町。

家に誰もいない時に、近所の誰かが持って来てくれた野菜が台所どころがっていて、魚屋さんは、うちの冷蔵庫を開けて、魚を置いていく。アメリカだったら、近所の人に通報されるかもしれません。

人種差別の歴史と、個人主義のために、アメリカが築いて来れなかった、人と人の強い思いやりと助け合い、平和な暮らし。変わりゆく現代社会の中、守らなければいけない大切なものが、高知にはいっぱいです。

私の原風景からのメッセージを込めて、新しい作品、"Re-explorations"(再探検)が始まりました。